



TITLE:

支那金石學概要石刻(六) 馬衡著

AUTHOR(S):

水野, 清一; 小川, 茂樹

CITATION:

水野, 清一 ...[et al]. 支那金石學概要石刻(六) 馬衡著. 東洋史研究 1939, 5(1): 60-66

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145662>

RIGHT:

支那金石學概要 石刻（六）

馬 衡 著
水 野 清 一 譯
小 川 茂 樹 註

第四 各種建造物附刻の文

附刻といふのは文を刻するために石材が設けられるのでなく、建築を構成する石材の上に附刻した文字をいふのである。いまこれを分類して述べると、第一は橋、第二は井欄、第三は石闕、第四は石柱、第五は石塔、第六は食堂・神位、第七は墓門・黃腸石、第八は石人・石獸、第九は石造物である。

橋

『水經注』穀水の條に洛陽建春門石橋石柱の銘を

載せてゐる。漢陽嘉四年西曆一三五に刻したもので、漢代の橋に刻した文であるが、書物に見えるのみである。

このほか蜀郡屬國辛李二君造作橋記西曆一六四 李翁析

里橋郡閣頌西曆一六九 是橋をつくつたがために作つた

ものであるけれども、みな附刻した文ではない。東魏

于子建造義橋石像碑武定七年西曆五四九 隋宋文彪等造澧水石橋碑開皇十六年西曆五九六 などまたみな花橋、析里橋の文と同

類なものである。附刻の文でなほ流傳してゐるものはたゞ宋以後のものばかりである。柱に刻したものは吳

縣西竺寺橋柱の題字宋寶元元年西曆一〇三八 がそれである。欄檻

に刻したものでは徐水縣徐河橋石闕の題名畫像昌中

西曆一一九 がそれである。そのほか橋の名を題したものは指を屈するに暇がないほどある。江蘇・浙江等の

省は宋元の年號をもつたものが、たくさんあり、明清のものに至つてはなほさら申すまでもない。橋を造

るといふことについては、昔の人は功德と考へた。經を刻したり、像を造つたりすることゝ意味が同じである。

それであるから、于子建等はその碑の上に像を彫

つた。すなはち人を利するがためだといふけれども、やはりこれは自分の福を求めるのである。

① 葉昌熾は橋柱と云ふ類を立てゝゐる(『語石』卷五)。馬氏は大體之による。

② 『水經注』卷一六、穀水の條、その文にいふ「陽嘉四年乙酉壬申。詔書以城下漕渠。東通河濟。南引江淮。方貢委輸。所由而至。使中謁者魏郡清淵馬憲。監作石橋梁柱。敦勅工匠。盡要妙之巧。橫立重石。累高周距。橋工路博。流通萬里。云云。河南尹邵崇隗。丞渤海重合雙福。水曹掾中牟任防。史王蔭。史趙興。將作吏睢陽申翔。道橋椽成阜阜國。洛陽令江雙。丞平陽降。監掾王勝之主。石作右北平山仲。三月起作。八月畢成。其水依柱。」と。

③ 『隸釋』卷十五に「蜀郡屬國辛通達李仲曾造橋碑」が載せられてゐる。宋時に雅州(四川省雅安縣)に存在したと云ふが、今は佚して、隸釋によりその文を窺ひ得るのみ。

④ 陝西略陽縣西北口村にあると云ふ。(『漢石存目』『金石萃編』卷十四錄文。馬氏が建寧三年とするのは五年の誤である。

⑤ 河内武德鎮にある。同書三十一卷錄文。

⑥ 同書卷四十に錄文。王昶は開皇十八年と考證してゐる。馬氏が開皇十六年としたのは「洛州南和縣澧水碑」の前碑と誤つたのであらう。

⑦ 『寰宇訪碑錄』卷六箸錄。

⑧ 吳式芬『金石彙目分編』卷三之一箸錄。

井欄 井欄に文字を彫つたのは梁の天監十五年○西曆五

六のものを最古とする。① その文は「梁天監十五年太歲

丙申。皇帝商旅の渴乏を愍み、乃ち茅山の道士□□永若に詔して、亭及び井十五口を作らしむ」とある。武帝が詔を下して作らしめたものである。② 江寧には湧金

井欄の題字があり、至德元年と題する。繆荃孫は陳の至德○西曆五八三と斷定してゐるから、これもまた南朝のものである。③ 北朝ではまだ井欄の題字を見ないが、

井を造つたといふ碑はある。新出土の魏廉天長造義井記○武定八年西曆五五〇はすなはちそのひとつである。④ 唐代の井

欄の題字では、わづかに漢陽の零陵寺元和六年○西曆八一

の一刻と宛平の開成四年○西曆八三九の一刻とがあるのみである。⑤ 宋元以後の著録に見たものは多く、數十種に上

る。たいていみな江蘇・浙江二省のうちにある。井を鑿るのもその意味はまた橋を造るのに同じである。そ

れでしばしば稱して義井といひ、梁代の刻文に見てもわかるやうに喜捨のために設けたのである。

① 葉昌熾の井欄條參照(『語石』卷五)。

② 『金石萃編』卷二十六錄文。井は句容縣城北城守營署後に



第二十六圖 少室石闕銘

あつたが、後に端方の有に
歸した(『陶齋藏石記』卷五)。

③ 光緒續江寧府志九に錄文あり。繆氏の考證は「藝風堂金石文字目卷一」参照。もと江寧府雨花山麓道西三忠祠南にあつたが、之も亦端方の藏に入つた(『藏石記』卷五)。

④ 顧燮光は汝縣西康堰村觀音堂にある同碑のことを記してゐる(『河朔訪古新錄』卷一)。

⑤ 『金石錄目分編』卷四箸錄、唐零陵寺井闕題字並傷。

⑥ 何紹基が北平宣武門外で發見して報國寺へ移置した。開成の年数が不明である。繆氏は之を開成四年と定めた(『藝風堂金石目』卷六)。

石闕 石闕には二つの種類がある。ひとつは祠廟の石闕であり、ひとつは墳墓の石闕である。①祠廟の石闕は四つあるが、みな漢代のもので、嵩

山の秦室石闕③○元初五年②少室石闕③○開母廟石闕③○光二年、④西曆一八二三年、華嶽廟⑤○永和元年⑥○西曆一三六六年、がこれである。このほか

は多く墳墓の闕である。これも漢代のものが多く、魏のものは二、晉のものは三、梁のものは十餘ばかりある。いま出土せる後漢の墳墓石闕ではたゞ武氏墓の二

闕⑥○建和元年⑦○西曆一四七年と南武陽の三闕⑧○元初三年⑨○西曆一八七年(西曆一四七一年)は年⑦が山東省にあるのみで、そのほかはみな四

川省にある。當時の風尙が察せられるが、また各地によつて相違がある。その形制は『金石圖説』と『金石苑』に載せたものもつともくはしい。たいていみな

石をかさねてつくり、左右に二闕が相對峙してゐる。漢の王稚子⑩○『金石錄』に元興元年、西曆一〇五といふ

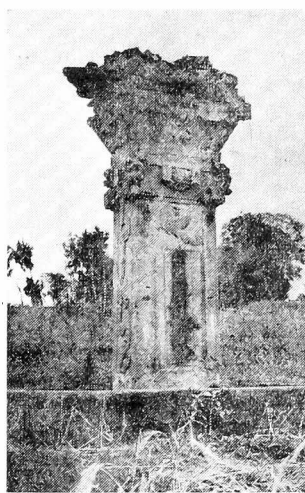
高頤(頤には碑があり、建安十四年、西曆二〇九である)⑪○沈君(年月なし)や蕭梁の陵墓に見る石闕はみなさ

うである。馮煥⑫○煥には碑があり、永寧二年、西曆一二二である)楊宗(年月なし)⑬○等のたゞ一闕だけのこつ

てゐるものは、あるひはそのひとつを失つたのであらう。その題字は多く正面の平らなところにある。高頤

石闕ではのきばにもまたある。端に一字づゝならび瓦當のやうになつてゐる。題するところの字は正面のと

同じである(『隸續』には王稚子石闕をのせてゐるが、六字だけのきばにある)。梁の石闕では、西側の闕の字はみな左行、あるひは反書である。その題字のほか、すべて空所のあるところにはみな畫像を刻してゐる。梁闕もまた同様である。^⑬世の中の人々はたゞ文字を重んずるばかりなので、拓工もしばしば畫像をのこして



第二十七圖 沈君闕

拓しない。明・清時代に、出世した役人や孝子節婦の旌表を賜つたものが、多く牌坊を建てるが、またこれも漢以來石闕の遺制である。たゞし、これにはわづかに題字があり、畫像がない。

① 華昌熾は石闕の條で廟門と墓門との闕を區別してゐる。

(『語石』卷五)石闕に就ては Chavannes, *La Sculpture à l'Époque des Han*, p. 23 (*Mission archéologique dans*

la Chine Septentrionale, T. 1) 關野貞博士「支那山東省に於ける漢代墳墓の裝飾」三一頁(東京帝國大學工科大学紀要八冊一號)參照。

② 『金石萃編』卷六。又 Chavannes, p. 41 解説。Planches, No. 1—13. 參照。

③ 『金石萃編』卷六。錄文『寰宇貞石圖』拓影。銘文には年記が缺けてゐる。王良常の竹雲題跋は延光二年と推定し 129. Chavannes, p. 55, planches, No. 27—38 參照。

④ 『金石萃編』卷六。錄文『貞石圖』拓影。Chavannes, p. 46, Planches, No. 1—26

⑤ 華嶽廟碑は『集古錄』卷一、『金石錄』卷一及卷十五等宋人金石書に著錄せられる。『貞石圖』拓影。原石は早く佚し、拓本にも華院本、長垣本、四明本の三系統があり種々の影刻本がある。

⑥ 『金石萃編』卷八。Chavannes, p. 102, p. 147. 關野博士三一—三四頁。參照。武梁石闕の支那文獻は容庚氏の近著『武梁祠畫象錄』卷末目錄參照。

⑦ 『八瓊室金石補正』卷三に文が錄せられる。その一、元和三年の南武陽平邑皇聖卿闕の拓影が關野博士に收められてゐる(同卷、一二四頁、二百七圖)。

⑧ 下に例とされてゐる王稚子以下の闕は皆四川省内に存する。

⑨ 牛運震『金石圖』、劉景海『金石苑』卷一。

⑩ 『金石錄』卷十四、『隸釋』卷十三。『金石萃編』卷四。

⑪ 『隸釋』、『八瓊室補正』卷七、益州太守及高頤碑及雙闕

録文。Segalen et l'artigue, Mission archéologique en Chine ① Atlas pl. XLVI—XLVIII, に寫眞があり、解説は氏 L'art funéraire a l'époque des Han. p. 110—117 参照。

⑫『隸釋』『八瓊室補正』卷十。Segalen, Atlas. pl. XV—XXVI L'art funéraire. p. 55—63

⑬『隸釋』『八瓊室』卷三。Atlas. pl. XIV, L'art fun. p. 50—55

⑭『隸釋』『同』卷十。Atlas. pl. XLIX L'art fun. p. 117—118

⑮梁の石闕には『八瓊室』卷十一、太祖建二闕碑を始め多く著録される。『江寧金石志』(参照) 又、その寫眞は、Segalen, Atlas. II. に收録せる。又最近中央古物保存委員會『六朝陵墓調査報告』が出版された。

柱 後漢の初平五年^①西曆一九四益州太守高朕修周公禮殿

記は木柱の上に刻し、その文は『隸釋』にある。^②これが柱の上に文字をほつたはじめである。唐宋時代建築

の佛寺道觀には石柱を喜捨して、その上に字をほつたものが往々にしてある。ほるものは、あるひは佛經や

佛名であつたり、あるひは施主の姓名であつたりする。^③華陰の華嶽廟^④唐大中乾符間 正定の開元寺^⑤武周

晉城の青蓮寺^⑥北魏登封の嵩陽宮^⑦北魏肥城の孝堂山石

室^⑧唐大中間、西曆八四七—六〇濟寧の普照寺^⑨北宋崇寧間、西曆一一〇二—七

ときはみな石柱の題字である。また鐵を鑄てつくるものがある。鳳儀の鐵柱廟^⑩唐時南詔國の建極十桐柏の淮源

廟^⑪左柱は宋の慶曆二年、右は^⑫三年、西曆一〇四二・四三のときものである(唐の

とき官署の屬吏の題名を柱に刻するものがある、名は同じだが、實は楹柱でない)。^⑬その柱礎の上に字を刻

したのは元氏の開化寺(年月なし、沈濤『常山貞石志』は考證し、北周のときに刻したものとす)海寧

の廣福寺^⑭宋天聖三年、嘉定の菩提寺^⑮宋治平四年、西曆

一〇二五、西曆一〇二五、嘉定の菩提寺^⑯宋治平四年、西曆

一一二八、吳縣の寶林寺^⑰宋淳熙十五年、などであつて、

みなまた建築のときに附刻したものである。民國十四

年の夏に河南の安陽で一方石を出土した。中央に一孔

をほり、題して「趙建武四年造、泰武殿前、獫戲絞柱

石孔といふ。猿のたはむれのために建てた柱に使用した礎石で、わづかにこの一例を見るのみである。その

ほか宮室の石材で題字のあるものは、石欄の題字として吳縣の玄妙觀^⑱南宋

の時濟源の濟瀆廟^⑲金の時にそれ／＼ひと

つあり、螭首の題字として益都の太虛宮^⑳元延祐元年

西曆一三三四にひとつあり、このほかにはあまり多く見ないやうである。

- ①『隸釋』卷一。
 ②葉昌熾の柱礎の條參照。『語石』卷五。
 ③『寰宇訪碑錄』には華嶽題名が多數あり、『八瓊室』卷五十五にはその一部分の錄文が集められてゐる。その何れが馬氏の石柱であるか不明。
 ④沈濤『常山貞石志』卷五六。及『八瓊室』卷四十一、四十二、四十三。年記を缺く。沈氏は武周の制字があるによつて武周時代と推定してゐる。馬氏が北周としたのは誤記。
 ⑤『金石彙目分編』には「宋陝石山青蓮寺地土記」があるのみで、亦他に當寺の題名が見當らぬ。
 ⑥『八瓊室』卷十七に「阜祐二年から宣和七年に至る、二十二段の石柱題名が載せられる」。
 ⑦郭巨石室柱上題名三種崇寧五年大申十年八月『寰宇訪碑錄』卷四(修郭巨石室題記崇寧五年『同』卷八)
 ⑧『濟寧金石志』卷三には宋建中靖國元年、崇寧元年、及二年の普照寺石柱題字を載録してゐる。
 ⑨『金石彙目』卷十九に著録。
 ⑩『藝風堂金石目』卷九、著録。
 ⑪『金石萃編』卷百十五、十六。郎官石柱題名。
 ⑫註⑧
 ⑬『金石彙目』卷七、著録。
 ⑭『寰宇訪碑錄』卷六及九。
 ⑮『同』卷九。
 ⑯この出土の始末に就ては馬氏の見聞以外に據るべきものが見當らない。この石は或は『金石錄』卷二十に見える

- 西門豹祠の石柱礎の一ではないかと想像される。
 ⑰著録に見當らない。
 ⑱顧燮光『河朔訪古新錄』卷十一參照。
 ⑲段松苓『益都金石記』卷四に大府學大成殿の月臺にあり元の太虛宮の舊物ならんと云つてゐる。



第二十八圖 青州舍利塔銘

石塔 浮圖といふのはまさに塔である。佛教徒のつくるものである。これをつくつて福を祈ること、佛典や佛像を刻するのと同様である。それであるから北朝

よりはじめてある。^① たゞ世に傳へる石刻で、**暉福寺** 魏太和十二年 西曆四八八 ^② **凝禪寺** 魏元象二年 西曆五三九 等のごときはみな塔を造つた碑であつて、石塔に附刻した文字でない。^③ その石塔に附刻したものではたゞ登封の**會善寺** 魏神龜三年 西曆五二〇 ^④ のが屋根に刻してあり、**吳縣治平寺**の王以成造塔 隋大業七年、すでに散佚 ^⑤ が盤に刻してあり、**陵縣**の王廻山造塔 唐天寶六歲 西曆六一一 ^⑥ は基壇に刻してある。**隋仁壽年間** 西曆六一一—六五七 ^⑦ の舍利塔に刻したものは、**青州勝福寺**、**岐山鳳泉寺** ^⑧ **鄧州興國寺**等のごとく、あるひは方板、あるひは圓板につくつてゐる。みな塔の下の盤か、あるひは舍利石函の蓋と思はれる。

① 葉昌熾の石浮圖の條（『語石』卷五）、拙稿『房山石浮圖記

銘考』（東方學報第五冊別冊二八九頁以下）参照。

② 常磐・關野博士『支那佛教史蹟第一集』六十八圖、寶字貞石圖卷二拓影あり。

③ 『八瓊室』卷十八、錄文。『寶字貞石圖』卷三、及『河北石徵』に拓影を收む。

④ 『寶字訪碑錄』卷二の河南登封の浮圖石蓋 神龜三年 が之に當るか。

⑤ 民國吳縣志卷五十九によると、原石は佚したが、覆刻本がある。石井闢と間違へられてゐるが、之は恐らく浮圖の身部に當るであらう。

⑥ 『八瓊室』卷五十九。

⑦ 『金石萃編』卷四十一。之は山東省青州金石保存所に現存する。『佛教史蹟』第四集。圖版百十九。

⑧ 『藝風堂』卷二、著錄。

⑨ 『金石萃編』卷四十。